

【 復活讃詞 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を
 神 爾 十 字 架 死
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ
 攜 香 女 悲 慰
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界
 使 徒 爾 復 活 世 界
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳
 さ せ た ま え り 。

【 洗礼祭前の主日アポリティキオン 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸
 す 、
 む か し イ リ ヤ が の ぼ り て の ち 、 イ オ ル
 昔 上 後
 ダ ン が わ は エ リ セ イ の こ ろ も に よ り て か え り
 河 衣 由 反
 て 、 み づ さ ゆ う に わ か れ 、 う る お
 水 左 右 分 濕

いたるみちはかれのためにかわけるみちとな
 路 彼 爲 乾 路 爲
 れり。これじつにせんれいのかたどり
 此 實 洗 礼 形 象
 なり、けだしわれらはこれによりて
 蓋 我 等 此 由
 いのちのながるるみちをわたる。ハリストスは
 生命 流 途 渉
 みづをせいにせんためにイオルダンにあらわれた給
 水 聖 爲 現 給
 まえり。

【 洗礼祭前のコンダキオン 第4調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 しゅはこんにちイオルダンのながれにありてイオアンに
 主 今日 流 在
 よぶ、われにせんをさづくるをおそる
 呼 我 洗 授 畏
 るなかれ、けだしわれははじめてつくら
 母 蓋 我 始 造
 れしアダムをすくわんためにきたれり。
 救 爲 來

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃^{さんえい}榮せられ、悉^{ことごと}くの天^{てんぐん}軍より伏^{ふくはい}拝せられ、萬^{ばんぶつ}物を無^むより有^{ゆう}と
 なし、人^{ひと}を爾^{なんぢ}の像^{ぞう}と肖^{しょう}とに依^よりて造^{つく}り、爾^{なんぢ}が諸^{もろもろ}の賜^{たまもの}を以^{もつ}て之^{これ}を飾^{かざ}り、
 願^{ねが}う者^{もの}に智^{ちえ}慧^{めいご}と明^{あた}悟^{つみ}とを與^{おこな}え、罪^{もの}を行^すう者^{もの}を棄^すてずして、其^{その}救^{すくい}の爲^{ため}に痛^{つう}悔^{かい}
 を立^たて、我^{われ}等^{らいや}卑^{ふとう}しくして不^{なんぢ}當^{しょうぼく}なる爾^この諸^{とき}僕^{おい}を、此^{なんぢ}の時^{せい}に於^{せい}ても、爾^{せい}が聖^{せい}な
 る祭^{さい}壇^{だん}の光^{こう}榮^{えい}の前^{まえ}に立^たちて、爾^{なんぢ}に當^{とう}然^{ぜん}の伏^{ふくはい}拝^{はい}讃^{さんえい}榮^{えい}を奉^{たてまつ}るに堪^たうる者^{もの}と
 なしし主^{しゅ}宰^{さい}よ、爾^{なんぢ}親^{みづか}ら我^{われ}等^ら罪^{ざい}人^{にん}の口^{くち}よりも聖^{せい}三^{さん}の歌^{うた}を受^うけ、爾^{なんぢ}の仁^{じん}慈^じと
 以^{もつ}て我^{われ}等^らに臨^{のぞ}み、我^{われ}等^らに凡^{およ}そ自^{じゆう}由^{じゆう}と自^{じゆう}由^{じゆう}ならざる罪^{つみ}を赦^{ゆる}し、我^わが靈^{たましい}と體^{からだ}と
 を聖^{せい}にし、我^{われ}等^らに生^{しょう}涯^{がい}善^{ぜん}功^{こう}を以^{もつ}て爾^{なんぢ}に務^{つと}むるを得^えせしめ給^{たま}え、聖^{せい}なる
 生^{しょう}神^{しん}女^{ぢよ}と古^こ世^{せい}より爾^{なんぢ}の喜^{よろこび}を爲^なしし諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}との祈^{きとう}禱^よに依^よりてなり、)

司祭) 蓋^{けだしわ}我^{かみ}が神^{なんぢ}よ、爾^{せい}は聖^{せい}なり、我^{われ}等^ら光^{こう}榮^{えい}を爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に献^{けん}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^よも世^よ世^よ
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 洗礼祭前の主日 第6調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか} 主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ なんぢ たみ すく} 主よ、爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたまえ。
爾 業 福 降 給

【 使徒經 (アポストロス) 298 端 ティモフェイ後書4章5節~8節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと たつ こうしょ よみ} 聖使徒パウエルがティモフェイに達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聴くべし、

誦經) ^{こ なんぢ いつさい こと けいせい くろしみ しの ふくいんしゃ わざ おこな} 子ティモフェイよ、爾は一切の事に儆醒し、苦を忍び、福音者の工を行い、

^{なんぢ しょく つく けだしわれすで まつり けん わ ゆ ときいた われよ たたかい} 爾の職を盡せ。蓋我已に祭として獻ぜらる、我が逝く時至れり。我善き戦を

^{たたか は みち つく しん まも いま のち ぎ かんむり われ ため そな しゅ} 戦い、馳すべき程を盡し、信を守れり。今より後、義の冕は私の爲に備えらる、主、

^{ぎ しんぱんしゃ か ひ おい これ われ たま ただわれ すなわちおよ かれ あらわれ} 義なる審判者は、彼の日に於て、之を我に賜わん、第我のみならず、乃凡そ彼の顯現

^{した もの たま} を慕う者にも賜わん。

(比較用 口語訳) ティモフェイよ、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義

の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 洗礼祭前の主日 第8調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ われら あわれ われら ふく くだ} 神よ、我等を憐み、我等に福を降せ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ かんげせ もつ われら てら たま} 爾の顔を以て我等を照し給え、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ 行 いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈 と 體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

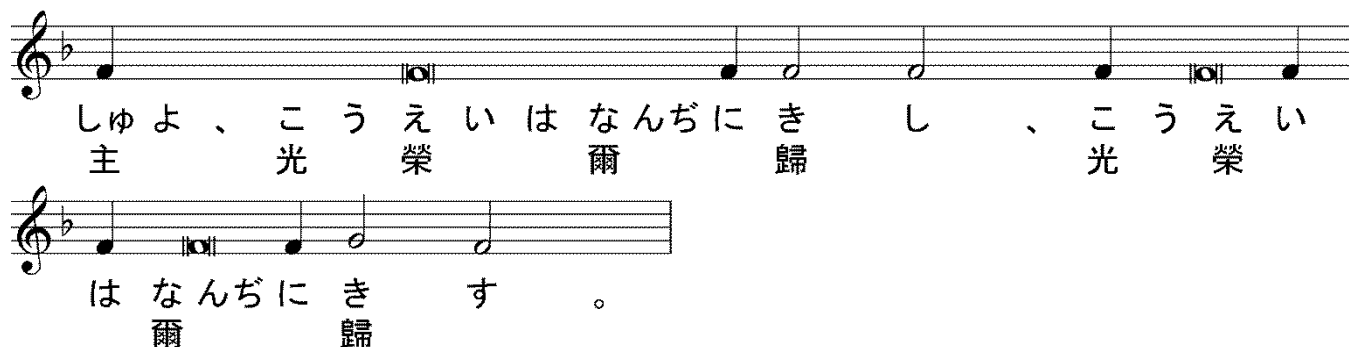
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮 を獻ず、今も何時も 世 世 に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書1端 1章1~8節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 神の子イイススハリストスの福音の始なり。諸預言者に録されしが如し、云く、視

よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備えしめん。野に呼ぶ

もの、聲在りて云う、主の道を備え、其徑を直くせよと。イオアン野に在りて洗を授け、

つみゆるしため、かいがいせんれい、つたぜんちおよひとびとい
罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳えたり。イウデヤの全地及びイエルサリムの人人出でて、

かれつおのれつみみとみながわおいかれせんうらくだ
彼に就き、己の罪を認めて、皆イオルダン河に於て彼より洗を受けたり。イオアンは駱駝

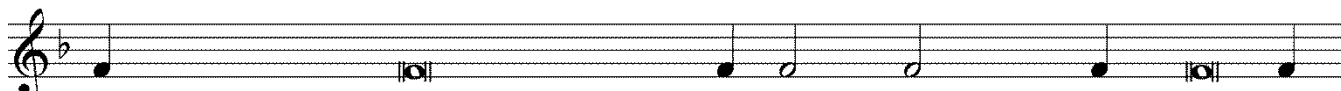
けごろもきこしかわおびつかいなごのみつくらかれのいわれあとさら
の毛衣を衣、腰に皮の帯を束ね、蝗蟲と野蜜とを食えり。彼宣べて曰えり、我の後に更

われつよものきたわれかがそのくつひもとたわれみづもつなんぢら
に我より強き者は来る、我屈みて、其履の帯を解くにも堪えず。我は水を以て爾等に

せんさづかれせいしんもつなんぢらせんさづ
洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。

(比較用 口語訳) 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。預言者イザヤの書に、「見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの道を整えさせるであろう。荒野で呼ばわる者の声がある、『主の道を聖体礼儀②(洗礼祭前主日 第7調) - 7

備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』と書いてあるように、バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民とが、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた。彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがんで、そのくつのひもを解く値うちもない。わたしは水でバプテスマを受けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸